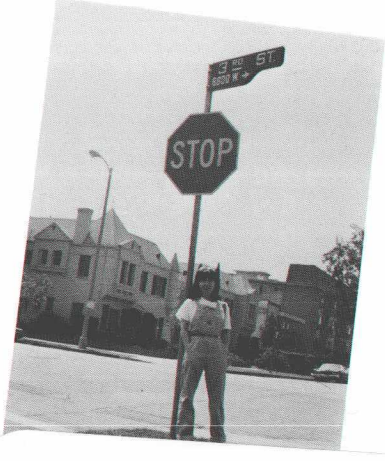
あずさのアドベンチャー'80

中島 梓

文藝春秋

あずさの
アドベンチャー'80

中島 梓



■著者略歴

昭和28年2月13日、東京に生れる。中島梓のほかに、栗本薫のペンネームも持つ。早稲田大学文学部文芸科卒業。
「文学の輪郭」（筆名・中島梓）で第20回群像新人文学賞受賞（評論部門）。
「ぼくらの時代」（筆名・栗本薫）で第42回江戸川乱歩賞受賞。
「絃の聖域」（筆名・栗本薫）で第2回吉川英治文学新人賞受賞。

© Azusa Nakajima, 1981

あずさのアドベンチャー'80

定価 980円

昭和五十六年六月一〇日 第一刷
著者 中島梓
発行者 杉村友一
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一
印刷 大日本印刷
製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

■内容目次

I

《あずさと淋しい占い師たち》 7

《あずさと侵略者(インベーダー)始末記》 39

《あずさとダイエット天国》 67

《あずさとグルメ地獄》 85

《あずさのバンド始末記》 103

《あずさと突撃レポーター》 121

II

《あずさと「作家養成所」》 141

《あずさと流行作家》 159

《あずさと「淋しいアメリカ人」》 185

《あずさと二人の作家の肖像》 203

III

体験的スキャンダル・ジャーナリズム論 223

いったい現実を把握しているものはいるだろうか

■初出掲載誌

《あずさと淋しい占い師たち》――――「文藝春秋」（昭和55年3月号）
《あずさと侵略者（インベーダー）始末記》――――「文藝春秋」（昭和55年5月号）
《あずさとダイエット天国》――――「文藝春秋」（昭和55年11月号）
《あずさとグルメ地獄》――――「文藝春秋」（昭和55年12月号）
《あずさのバンド始末記》――――「文藝春秋」（昭和55年10月号）
《あずさと突撃レポーター》――――「文藝春秋」（昭和55年8月号）
《あずさと「作家養成所」》――――「文藝春秋」（昭和55年6月号）
《あずさと流行作家》――――「文藝春秋」（昭和55年4月号）
《あずさと「淋しいアメリカ人」》――――「文藝春秋」（昭和55年7月号）
《あずさと二人の作家の肖像》――――「文藝春秋」（昭和55年9月号）

以上連載タイトル『あずさの現代風俗探偵帖』

《体験的スキャンダル・ジャーナリズム論》――――書き下ろし
《いったい現実を把握しているものはいるだろうか》――――書き下ろし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

あずさのアドベンチャー'80

装幀　坂田政則

I

《あずさと淋しい占い師たち》

1

全国に、占い人口――つまり、プロの占い師すなわち占いを「見る側」、及び「見てもらう側」――単なる「占い好き」から狂信者まで、それをすべてひっくるめて、はたしてどのくらいあるか、ご存じだろうか。

と、いうような具合に、沢木耕太郎さんなら書きはじめるのだろうと思った。もちろん、何か別の云い方にせよである。

ルポルタージュをやるのは、はじめてである。一体、どんなふうに、何をやればいいのか、ずいぶん困った。ルポめいたものはやったことがあるが児戯に類する。第一、私は小説書きだ。小説は書くが、あまり資料のいるものを書いたことがなくて、「資料が弱点」と云われる。ところが、ルポというのは、調べごとだろう。つまらぬことを引き受けてしまった。なぜ、引き受けたか。人に会いたかったのだ。人に会うのは好きである。

ところで、ルポとは一体何をするものか。

私には座右銘というのはあんまりないが、二つだけ、実に好きな言葉がある。二つとも、本の――それもミステリーの中の言葉である。ひとつは、レックス・スタウト描くデブの探偵ネロ・ウルフの言葉で、彼は、頭がよわいと人から馬鹿にされている下宿屋の女中に、「彼(被害者)はその新聞をくずかごにすてたのかね」とたずね、女中が「いいえ、すてませんわ。くずかごなんかないんですから、くずかごにすてるわけがありませんわ」と答えると、実に満足して、「ご尤も。なるほど。実に尤もな理由だ」と云う。

これが私の頭にこびりついていて、これが要するに論理的にものを見る見かたを私に教えてく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れたと思う。もうひとつは、ど存じの「メグレ警視」である。新聞記者がきてたずねる。「誰が犯人だと信じておられます？」メグレは答える。「私？　私は何も信じないよ」

このリフレイン。「どうお考えです、いまの彼の態度」「私には考えはないよ」——彼はいつも、見、きき、話し、感じ、そして考えはない。そしていつも、正しいのは結局メグレなのだ。かくされていた模様、ものごとの真の相、それはいつも、メグレやネロ・ウルフのような人の目にだけ、おのずから浮かびあがってくる。

なるほど、と私は考えた。ルポライターは、メグレであればよいのか。

たしかに、ルポライターは、名探偵のように、人々の生活へ訪れてゆき、そして話しこみ、彼のうしろでまたドアがしまる。「あ、ちょっと、奥さん、もう一つだけおききしたいことがあるんですがね」——だが、生は犯人たち、そして被害者たちのものであり、決してコロンボ警部や、メグレ警視や、ネロ・ウルフのものであることはないだろう。探偵にだって私生活がある。しかしそれを、人々はちっとも知りたがっていないのだ。

昔、人に会うのをわりあいにたやすく考えていたころ、沢木耕太郎さんにインタヴューを申しこんだことが三回ある。結果はぜんぶ没だった。「僕はインタヴューする側だから」と編集者に云われたそうである。それで、結局、いまだに沢木さんとは会っていない。

ルポルタージュは、探偵小説なのだ——とどのつまりは、私はそう考えるようになった。ルポライターは名探偵という抽象人格だ。そして、彼は、次々に事件と、そのうしろにひろがる生活と、歴史と、その中で生きる人間たちに入りこんでは、またドアをしめて出てゆくのである。「私には何も考えはない。ただ見るだけだ」——これから書くのは、私がそんなふうに思いはじめるに到った、その経緯なのである。

2

それで――

最初に戻って、全国にいま占い人口がどのぐらいあるかというと、約四百万人なのだそうである。どういう根拠で出した数字なのだかは、まるで知らない。

ルポは、探偵小説だ、と考えて、その私がルポの第一回に「占い」を対象にしようと思った、というのは、ごく単純に「占いブーム」ということがあったからである。例の「天中殺ブーム」があったし、半年前に、ついに、という感じで、星占いの専門誌なぞが出たし――それも二つ、「ミュー」と「マイバースデイ」――、云々、というわけだ。しかし、それよりももっと単純な理由――私は、占いが好きなのである。

どちらかというとマニアの部類に入るかもしれない。毎年、鶴書房から出す「なんとか座」という小冊子を買うばかりではない、門馬寛明著『西洋占星術』だの、マダム梢月著『愛と性の惑星占い』だのといったものまで、しこたま買いこんできて読む。これは直接遺伝かもしれない。私の母親は新章文子さんの『四柱推命入門』を買ってきて、知人の誕生日を調べては何だかんだ云っている。その母かたの大伯母は、なんと本職の易者をやっている。早い話が私はその例の四百万分の一なのだ。みずがめ座、二黒土星、癸巳、辰巳天中殺で上昇宮はやぎ座で、ペンネームも本名も姓名判断でつけて(本名は私がつけたわけではないが)、引越しの前には方位を見る(見させられる)、方違え、物忌をしないのがふしぎなほどだ。

では占いを信じているのか？　いやいや。「私は何も信じない」――ＳＦ作家がＵＦＯを信じこんでいると思われるのはまっぴらだ、それなら童話作家は妖精と鬼を信じ、スパイ作家は００

7のような男の実在を信じ、ラブロマンの作家は純潔と愛の勝利を信じなければいけませんかね、とアイザック・アシモフが云っていたっけ。

「モア」にのった「コスモポリタン」の特集で、「男が女にうんざりするとき」の解答として、「あなたの星座はナーニ？」ときかれたとき、というのもあった。そうだろうね。「アラッ双子座なの？　あたしてんびんよ、てんびん座と双子座は相性最高なのよ」なんて、にじり寄られたりしてみたまえ。

占いを信じているとも思わない。現に、このあいだ、その易者の伯母に、「引越しは年の内」「年明けはダメ」と云われ、『天中殺入門』を見たら今年から天中殺とあり、星占いで「新しいことはするな」とあったにもかかわらず、引越しを敢行してしまった。

それでは何なのか？　まあ、長いこと、私は人間というものは「自分について」人が何か云うのを何よりききたいもので、本当は他人になど何の興味もない、ということを人間の基礎として認識して来た。

たしかに、人は、悲しいくらいに、「関心をもってくれる」ことを求めている。自分に関心をひきつける能力と自信がないと、代償行為としてスターのファンになり、そのスターが世間から得る関心を見て満足する。それにも満足しきれず、自慢話を自分からして代償にすることもできぬ人は、占い、カウンセラー、心理学、井戸端会議に走る。

占いというのは淋しいものだ、というイメージがあったのはそのせいかもしれない。「占星術は、心の不安に理由をつけて、不安を取り除いたり、不安をかき立てたりする」（東京新聞「筆洗」一月十七日付）という見かたが一番、一般的かもしれないが、私が自分をタネにして分析すると、人が占い師にききたがっているのは世界の情勢や事件や家内安泰なんぞでは決してない。人は

「あなたは××ですね」と云ってほしいのだ。

とにかくどんな客であれ、何を相談にきたのであれ、占い師（またはカウンセラー、心理学者、精神分析医）は、「あなたは一生懸命やっているのに、周囲は誰もあなたを理解してくれないんでしょう」と云えばいい。そうすれば、どんな人でも身をのりだして、「そう、そうなんです」と叫ぶ、という話があった。そのぐらいに、人は、人が自分に関心をもってくれるのを、人が自分のことをしゃべってくれるのを待っている。

世情が不安になると、インフレや不景気になると、占いが流行る、というが、実際には、不安なのは人に自分のことをしゃべってもらえない人間たちであって、かれらは不安な世相やインフレや戦争になど、きっと何の関心も共感も抱くことができないのである。

占い師たちはそういう人たちに、世の中にかわって関心を抱いてやる。「ああ、この手相は、たいへん珍しいものでね。あなたはとても独特な運命を持っていますよ」「かに座は家庭的だから、あなたはいい奥さんになれるわよ」——何でもいい、そんなようなこと。

私は、占い師たちに会うことにした。

3

自分が何を求め、何にぶつかり、何を知りたがっていたのか、実は、全然知らない。

とにかく『天中殺入門』の和泉宗章には会いたかった。それから占星術の人たちと。四柱推命、気学、姓名判断、手相、人相——何でもいいのだ。何でもいい。なぜなら、自分が何を知りたいのか、私にはわからないのだから。女の子に会わしてよ、とだけは頼んであった。ふつうの女の子。私も大学で、クラブの合宿で、夜、こたつにカードを並べて占ったものだ。「私のことを好

きな人……私の好きな人……私と結婚する人」

編集部のH青年は、青山学院の占術研究会の女の子を集めました、と云ってきた。取材第一日目は、まず楽にはじめようというので、その子たちと会うことにする。青学の近くの「フランセ」で会った。

鈴木さん、熱田さん、岩沢さん、坂主さん。全員二年生で、ふつうの女の子である。わりあい、美人が揃っている。みんなニュートラだ。一見占い師ふうなのは熱田さんだけ。当り前だよ、十九歳だ。何を考えているんだ。

「占研は全部で六パートにわかれているんです——星占い、人相、手相、姓名、ジプシー、タロット——です」

「横のつながりなんかはないんですか」

「もちろん、互いに見たりしますけど」

「合宿もあって——主たる活動はそれじゃ学園祭ってわけ——？」

「そうですね。青祭の時は——よその部よりは人気あるみたいです。列ができますし」

プロ志望はいない。雑誌の占いのページはやはり見るがそんなに信じすぎてもいない。どうして、このごろ、占いブームなんだと思う？

「そうですね——やっぱり、不安みたいですね」

あなた方は見る側なわけだけど、やはり人間の心の割り切れないもやもやとか、そういうのに興味があって——

「そうですね」「そうです」

いけないね。誘導尋問になっちゃった。長いこと、してないので、人に話させる技術を忘れて

いる。カンが狂っているのだ。口をつぐんでいるのが恐ろしい。女の子たち、肉入りやクリーム入りのクレープをたべる。坂主さん、乙女座。岩沢さん、さそり座。熱田さん、みずがめ座、ご一緒。鈴木さん、かに座、家庭的、ボイン、小柄。

「どうもありがとう。試験中ごめんなさい」

大学祭の模擬店、学生会館のロビー、上級生、恋占い、ニュートラ、期末試験、デートと不安とクレープとアメリカンコーヒー。そんなに昔のことではない。私にも見当がつく——要するに、サークルが軽音楽バンドであろうが、長唄研究会であろうが、占いの研究会であろうが、たいしたちがいがあろう筈はないのだ。

「こんなもんですか」

「こんなもんでしょう。次は」

「志木です。式貴士さん」

ようやく、というかまず一人目の占い師、登場である。式貴士、SF作家、主著書『カンタン刑』『イースター菌』。またの名、ウラヌス星風、そのまたまたの名、間羊太郎、ワセダ・ミステリクラブ出身。私の周囲の人たちとはひとかたならぬつながりがあるし、第一『カンタン刑』の帯の推薦文は中島梓という人が書いている。そこで、「フランセ」を出るとき、手土産のケーキを買った。これ、取材費かしらん。

書くのを忘れていた。一月十六日、晴れ。先週の日曜に雪が降った。タクシーで志木に向かって、埼玉県へ入ると、あちこちに雪が残っている。

「埼玉は東京より寒いんでしょうかね」

「北は北だからね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c